
飲み会帰りに

桃山マサル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
飲み会帰りに

【Nコード】
N2503J

【作者名】
桃山マサル

【あらすじ】
大学生活のワンシーン。

長谷川は妙に醒めていた。ビールにカクテル、それに日本酒やウオッカなどを節操なく飲みまくったわりには、ほとんど酔っていなかった。足取りもしっかりしていて、むしろビール二杯しか飲んでいない福本の方が辛そうだった。

「うおえ」

肩を並べて歩いていたはずの福本が、いつのまにか後ろにいた。外灯の下にうずくまり口を押さえている。

「おい福本、こんなところで吐くなよ」

忠告は無駄に終わった。福本の惨めな姿を、道行く人々は呆れ顔で見ている。

長谷川は他人のふりをしつつ、ため息をついた。

何やってんだ。

心中で呟いた言葉は、げえげえと胃液を吐き続ける友人へのものではなく、自分に向けたものだった。

長谷川はあと数ヶ月で大学三年生になろうとしていた。

地方の大学とは言え、地元では有名な大学である。少なくとも卒業さえすれば就職には事欠かないという触れ込みを高校生時代に聞き、何となしに受験をしたのである。学科はどこでもよかったので一番倍率の低い学科を選び、危なげなく合格した。入学してから聞いた話だが、長谷川の受けた学科は倍率こそ一倍を超えていたが、実際にはすべり止めのために受けた受験生が大勢いて、結局は定員割れのような状況だったらしい。

そのことについて、長谷川は特に何も感じなかった。自分は合格した。その事実だけが、長谷川自身や、教師、親たちにとっては重要なことだった。

「おい、大丈夫か」

胃の中のものを一通り吐きつくした福本は、口の端から涎を垂ら

しながらぜいぜいと喘いでいた。さすがに見かねた長谷川は、その背中をさすってやる。

「福本は酒弱いんだから、無理して飲むなよ」

「だって……先輩に勧められたら……飲むしかない……」

「アルハラですよって言えば先輩だって無理強いはしないさ。昔の体育会系とは違うんだぞ」

「でも……そんなこと言ったら……空気読めない奴とか言われる……」

福本は体格こそがっしりしているものの、気の弱い男だった。

「気にし過ぎた。……ほら、早くしないと終電逃しちゃうぞ」

「分かってる……ちよつと待って……」

福本は口元を拭き、大きく深呼吸をした。

「ふう。もう大丈夫だ。悪かった」

立ち上がった福本は吐く前よりもだいぶ顔色が良かった。人間の身体はけっこう便利にできてるもんだ、と長谷川は思う。

二人は地下鉄の方向へと、夜の町を歩いた。

「福本はさあ」

「うん？」

「研究室、どこ行くか決まった？」

「うん、まあ」

「どこ？」

「第一希望は坂下先生のところ。第二希望は佐藤先生か木下先生のところ」

「ふーん。そういえばお前、坂下先生のところに何度か質問に行ってたな」

「うん。講義で分かんないところがあったからね」

先生に質問に行く。まるでテスト前の高校生だな、と長谷川は思ってしまう。

「長谷川は決まったの？」

「まだ」

決まっていけないというより、正直なところ長谷川は行きたい研究室がなかった。もともと来たくて来た学科ではない。どの研究にも興味が沸かなかった。

「希望調査票の提出は来週だよな」

「ああ」

「研究室見学とか行っただの？」

「いや、まったく」

「今からでも行っただろうがいいんじゃない？」

正論だった。そしてそんな正論を吐く福本に、長谷川は軽い苛立ちを覚えた。

「いいよ。面倒くさい」

「でも将来のためには研究室は慎重に選んだ方が……」

「うるせえなあ」

福本は何も悪くないのに、ついつかかってしまう。

「研究室なんてどこ行っただって同じだろ。どうせ二年で卒業しちまうんだ。就職先だっただけも似たり寄ったりじゃねえか」

「そうだけど……」

「将来のためとか言っただけよ、そんなに将来が大事かよ。結局はみんな普通の会社に勤めて、普通に働くんだろ」

「院に残って研究、っていう選択肢もあるよ？」

長谷川は福本を見た。

「お前、院行くのかよ」

「うん、その予定」

福本は基本的に頭がいい。今まで単位を落としたことはないし、成績もクラスで上位に入る。長谷川とて決して頭が悪い方ではないが、試験ではいつも合格点ギリギリだった。普段から講義などまともに聴いていないのだから当然である。

苛立ちが怒りに変わった。

「ああ、そうかよ！」

突然上げた大声に、福本は驚きで目を丸くした。

俺は酔っているんだ、と長谷川は自分に言い訳した。

「お前は勝手に院でも行ってるよ！」

そうだ、酔ってなければこんな子供みたいに騒ぎ立てるものか。「どうせ俺は中途半端な落ちこぼれだよ。単位落として留年してるわけでもねえ、熱心にサークルに取り込んでいるわけでもねえ。適当に勉強して、適当にバイトして、適当に酒飲んで、適当に遊んでいる、可も不可もねえつまらねえ人間だよ」

長谷川は情けなくて涙が出そうだった。

大学に入りたての頃は、希望に満ち溢れていたような気がする。自分は何でもできて、どんな夢でも叶えられるような気がしていた。しかし、大学生活にも慣れ、ぼんやりと毎日を送っているうちに、何かが失われていくのを感じた。輝かしい未来に続いていたはずの道が、いつの間にか横道へ逸れてしまっているのに気付いた。

一体原因は何なのかと、一晩中考えたこともあった。しかし何も分からなかった。

全身を覆う閉塞感が怖くて仕方がなかった。身近な人たちがどんどん先へと歩いていくのに、自分一人が立ち止まっているという事実が、何よりも長谷川自身を怯えさせた。

「ちくしょう」

居酒屋の看板を蹴った。近くを歩いていた女性がびくっと肩をすくめた。

「長谷川、やめろよ」

福本が肩をつかんだ。

「うるせえ、お前に何が分かる」

他人や物に当たると、自分がどんどん惨めになるのが分かった。けど止められなかった。今度は路上駐車していた自転車蹴り倒す。二、三台がドミノ倒しになって、派手な音を響かせた。

「こんなところに停めるな、邪魔なんだよ」

社会モラルを口にする自分が、ますます痛々しい。

「長谷川……」

福本はもう何も言わなかった。少し離れたところで、長谷川の暴行を見つめていた。

街路樹を殴ろうとして、長谷川は思い切り外した。勢いのついた身体は止まらず、ガードレールにぶつかって歩道に倒れた。

「ちくしょう……」

腕の擦り傷から血が滲む。この救いようのない男を、ネオンの光は無情に照らしていた。

＊おわり＊

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2503j/>

飲み会帰りに

2010年10月8日15時07分発行